

生活ワイド やまなし

人生100年時代

どう支える？

9月19日は「敬老の日」。人生100年時代とも言われる日本では、お年寄りが住み慣れた地域や家で暮らすための環境づくりが課題となっている。介護サービスの充実が求められるが、介護人材が不足している現状では地域住民による支え合いも大切になる。生活のさまざまな場面でお年寄りを支える県内の取り組みを紹介する。(文化・くらし報道部)

木漏れ日が差すダイニングルームで昼食を終えた女性が席を立ち、かっぽしを着て袖を通して皿を洗い始める。別の女性が隣でふき始める。北杜市小淵沢町のペンションを改装した多機能型シェアハウス「わがままハウス山吹」。浴室やトイレがパリアフリー化され、高齢者1人ができる家事をしながら共同生活する。わがままハウス山吹は、認知症高齢者のグループホームなどを運営する一般社団法人「だんだん会」が、支援付きシェアハウスとして2019年に開設。日中は寄り添いスタッフが滞在するが、決められた日課はない。1人暮らしが不安な人から終末期の人まで幅広い層が暮らし、これまで何人かの入居者がこの家でみとられた。

「八ヶ岳南麓に移り住んでも、高齢になり(都市部に)戻らざるを得なくなる人がいる。要介護でも終末期でも、死ぬまでここで暮らせる仕組みをつくりたかった」と、看護師でだんだん会理事長の宮崎和加子さん(66)は語る。自らも八ヶ岳の自然に魅了され移住した一人。東京都の訪問看護ステーション第1号を立ち上げ、長年グループホーム運営に携わった経験を生かし、医療や介護の専門家、地元北杜市の福祉行政経験者らと16年にだんだん会を設立した。

だんだん会が認知症高齢者のグループホームを最初に設立してから5年が過ぎ、訪問看護ステーション、介護と看護の巡回サービス、リハビリ特化の通所施設など活動は10事業に広がった。目指すのは看護と介護、リハビリが一体となった住民主体の地域づくり。住民の自立した暮らし



支援付きシェアハウス「わがままハウス山吹」で食後に食器を洗う入居者の女性(右2人)と寄り添いスタッフ 北杜市小淵沢町

だんだん会(北杜) シェアハウス みとりまで共に暮らす

を在宅ケアのプロ集団が支える。だんだん会は住民自治を重視していて、その取り組みの一つが、山吹で入居者と現場スタッフ、だんだん会職員が生活課題やルールを話し合う「ほっこりミーティング」だ。玄関の解錠時間から入居者間の金品授受、みそ汁のだしの取り方まで議題は多岐にわたり、決め事を忘れてしまう人のために貼り紙で共有する。入居する岡本美和子さん(88)は「ここは自由でストレスがない。元主婦として、できる家事は自分でしたい」とほほ笑む。

寄り添いスタッフには看護や介護の資格を持たない人も多く、要介護者の入浴などはだんだん会が運営する巡回サービスを利用する。設立時から寄り添いスタッフを務める石川由美子さん(69)は「地域にいる有資格者は限られ、必ずしも全ての入居者が介護を必要としない。介護と、食事作りや掃除・サロン業務を線引きすることで、『それならできる』と協力してくれる人が増えた」と振り返る。

20年、認知症のある90代女性が山吹でみとられた。死期が近づくと、他の入居者が「食べたいものない?」「待っているね」などとお見舞いを続けた。「認知症でも一緒に暮らせるし、みとりでもらうこともできる。死を隠さないこと、私ときもこうしてもらえ」と、他の入居者の安心感につながる」と宮崎さんは話す。

だんだん会では、サービスを提供するスタッフが北杜市内の家から家、施設から施設へ、1日100円を移動することも可能。都市部とは違う困難さがあり、専門的な人材も不足する中、住民同士の支え合いが果たす役割は大きい。

「高齢になってからの暮らしや介護、死やみどりのイメージは変わりつつある」と宮崎さんは語る。「いろんな価値観があつていい。でも、悲惨な孤独死でなく、自分で選んで覚悟して死にたい。その一つを私たちがつくりたい」

〈中嶋寿美子〉



「ここで死ぬまで暮らせる地域づくりをしたい」と語るだんだん会理事長の宮崎和加子さん 北杜市長坂町夏秋